

# オウム病

## 発生

オウム病はオウム病クラミジア (*Chlamydia psittaci* 以下 *C. psittaci*) による人獣共通感染症である。

感染様式としては、病鳥の排泄物からの *C. psittaci* の吸入が主体であるが、口移しの給餌や噛まれて感染することもある。

オウム病の潜伏期間は1~2週間で、ヒトでの症状は急激な高熱と咳嗽で発症する。軽症の気道感染から、肺炎や髄膜炎までの多様な病態を含む。

オウム病は本来トリの感染症で、基本的には不顕性感染である。保菌していても一見健康であるが、ストレスがかかった状態、例えば弱ったときやヒナを育てる期間に排菌しやすく、症状を出す場合もある。

鳥で認められる症状は

- ・羽を膨らませて元気が無い
- ・食欲低下
- ・口、総排泄孔、眼の周囲の滲出物
- ・翼・脚の麻痺 などである

ドバトの保菌率は20%程度と高く、ヒトへの感染源として注意が必要。

## 国内での発生

2001年 川崎市の動物園でヘラジカのお産に立ち会った獣医師などが感染。

2002年 島根県の動物展示施設において、従業員および来園者約20名が集団感染。

2005年 一般家庭で飼育されているオカメインコより家族全員感染。

## これらより

### 輸入した鳥

訓練に使用するハト

訓練中の野鳥・野生動物との接触

から感染するリスクがあり注意が必要である。特に訓練用のハトはドバトとの接触歴が不明であるためより注意が必要。しかしながら、人の健康状態（免疫）が良好であれば感染する確立はそれほど高くなく、診断さえついても治療は難しくない。しかしながらベクターである鳥類の場合、一生 *C. psittaci* を保有し続けることがあり、治療しても完全に排除することは困難であり、またそのも判断不可能である。